

座談会 「韓流」から新しい東北アジアの創造を

鄭

今日はお忙しいところありがとうございます。ざっくばらんに進めていきたいと思うのですが、いま日本でも「韓流」といわれるような韓国に対する関心の高まりが出てきています。

今回取り上げたいと思っているのはそもそも「韓流」をみなさんがどう見ているのか。そして「韓流」の底流に流れているもの、また底流だけではなくて、これまで李鳳宇氏なども積極的に進めてきた部分もあると思うのですが、在日コリアンがどういう役割を果たしてきたのか、これからどういう役割を果たせる可能性があるのかということも話していきたいと思います。

またできれば広い視野から在日の文化がアジア的な視点でどのような可能性をもっているのかと思うところを語っていただければと思います。はじめにどなたか口火を切っていただければと思うのですが。

篠藤

私はヨン様と誕生日が一緒だというだけで知り合いにうらやましいと言われましたよ。

鄭

やはり回りには話題は多いのでしょうか。

篠藤

すごいですね。

鄭

李鳳宇さんはどう見ておられますか。

李

いまもたまたま日経新聞のインタビューがあって、「韓流」の仕掛け人ということで、仕掛け人ということではないのですが。

いまの状況をみて思うのは、一つは韓国のドラマや映画をつくっていきときのパワーが格段に増したと感じます。それに「韓流」になっているのは日本だけじゃなくて、中国などもそうです。それを見るとソフトの力というか、そういうものが強くなっているのを感じます。

ただ日本でここまでというのを見ると、それは極端にいうと日本が情けなくなっているからじゃないかとも思います。日本のドラマや映画、それ自体の魅力がなくなっている。い

まテレビドラマの視聴率も一〇%を切っていますし。

ですからいま五〇代、四〇代、三〇代、その中でも特に女性がお金を持っているといわれているのですが、五〇代の人たちは映画をたくさん見たけど、今の層ではない。四〇代の人たちは、昔は自分たちは漫画をたくさん読んだと。それで三〇代の人たちは昔は自分たちはテレビドラマをたくさん見たと。そういう人たちがいま自分たちが見られるものがないという気持ち、それを満たしているという役割があるんじゃないでしょうか。そういう意味では「韓流」と言われると少し違うなとも思います。それに「韓流」というのはどこかで「一過性」というような感じもあって、そうなってもいけないんじゃないかとも思うんです。

鄭

先日あるシンポジウムがあって中国に行ったのですが、ホテルでテレビを見てると韓国のドラマをやっていましたね。

李

いまは多いですよ。チャンドンゴンは中国では大スターですよ。陳凱歌（チェンカイコウ）監督の映画では主演ですからね。

鄭

テーマはどのようなものですか。

李

プロミスという映画なんですけど、いま中国の映画は「英雄（ヒーロー）」や「Lovers」のようなヒーローもので、ワイヤーアクションなどもつかったものが多いのですが、それと男二人と女一人の三角関係を扱っています。

鄭

韓国映画で「ブラザーフット」が公開されましたが、「シュリ」と比べてどうだったんでしょうか。

李

「シュリ」よりも観客は多くないんじゃないですか。

篠藤

いま「冬ソナ」が社会現象のように言われていますけれども、その前に「シュリ」や「JSA」などの映画が日本でもヒットして韓国映画が身近になっていたあとワールドカップ

も大きかったと思いますが、それぐらいからの流れなんでしょうね。

鄭

「月はどっちに出ている」がいまから一〇年ほど前ですね。

李

ちょうど十一年になります。

鄭

ちょうど一九九四年にワンコリアフェスティバル一〇周年のパンフレットに特集を載せたのですが、あれほど多くの人が見た在日の映画もなかったのではないかと思います。

そういう意味では在日コリアンあるいはコリアに関心を持ってもらうという意味では大きな役割をしたと思うのですが、プロデュースした立場からどう考えておられますか。

李

インパクトはあったと思うのですが、「月はどっちに出ている」をやった翌年に「西便制～風の丘を越えて」という映画がありました。どちらかという一番手応えがあったのは「西便制～風の丘を越えて」でしたね。それは見た人たちの満足度が深かったんです。

もちろん「月はどっちに出ている」も良かったし、日本人に与えたショックは大きかったんですが、それはどちらかという映画業界に与えたインパクトの方が大きかったんです。

「西便制～風の丘を越えて」は日本の知識人に与えたインパクトが相当大きかったですね。当時は中国映画が全盛だった頃ですから「韓国映画もあるんだ」という印象を与えました。

その次の飛躍が「シュリ」だったんです。

もちろんその間もいろいろな映画をやってきましたけれども、韓国映画の受け皿のすそ野を広げたという意味では「西便制～風の丘を越えて」だったし、それが「シュリ」をやれるという自信にもつながりました。

篠藤

「西便制～風の丘を越えて」を見て韓国映画のレベルの高さに衝撃を受けて、その次に大きく出てきたのが「シュリ」でしたから、韓国映画の幅というものをすごく感じました。ある意味で映画としては両極的なものですから。そういうことにも驚きを感じましたね。

「安定剤」と「興奮剤」を併用している状況

姜

僕は一方でビジネスという観点もありますが、どこかで日韓の政治的なあり方として取材

をしてきたのです。ですから一九九八年の金大中氏が大統領になったのは大きかったですね。

その年の一〇月に日本の国会で感動的な演説をして、その時に彼が日韓の「協働」という言葉を使いました。これは日本の常用漢字にはなくて日本のマスコミは「協同」という字を使ったのですが、この直後に日本の映画が一部韓国で解禁になりましたよね。条件付きで。

でも僕も「家族シネマ」の公開で一緒に韓国に行ったのですが、そうしたら舞台挨拶のときに観客が六人しかいなくて、梁石日さんなんかは怒り始めて。そういうのを見ると金大中大統領が自分の目の黒いうちに日韓の関係正常化を果たしたいという強い決断をしたんだけど、韓国国内でも当時は反対の声が大きくて、案の定そういう状態でした。

その一ヶ月後くらいにSESというグループがデビューしました。韓国、在日、在米のコリアン女性たちのユニットで、カン・スージーさんの事務所にいたんです。それで六本木のヴェルファーレというところでイベントをしたんですが、まったく人気が出なかった。他にも同じような例があります。唯一映画業界だけだったんです。

結局は韓国のコンテンツを日韓の政治指導者が受け入れるといいながら、日本のマーケットが受け入れなかったんです。一方通行で双方向にはならなかった。そういう中で演劇とかいろいろなジャンルで努力はありましたけど、孤軍奮闘して目に見える形で変化をつくってきたのが李鳳宇さんでしょう。でもそれはあくまで一部であって、韓国の人には「やはり日本は我々を受け入れていない」と思っていますし、日本側はどうかというと無関心なんです。ですからいまの「韓流」を政治的な部分から見ると、韓国から見るとトランクリザー、安定剤ですね。これで双方のコンテンツが受け入れられて、お互いがウインウインの関係になるきっかけになると。しかし日本から見ると興奮剤なんです。一過性の。だから政治的に見ると安定剤と興奮剤が併用されている状況ともいえますね。

鄭

興奮剤という言葉もありましたが、ではなぜこれほどの韓国ブームがおきたんでしょうか。

篠藤

先ほどお話にあったようなこれまでの韓国文化に対するとらえ方の変化もあったと思いますが、やはりドラマとしてストーリーがしっかりしていて、見応えのあるものであったということが大きかったのではないのでしょうか。

いまの日本のテレビは、子どもが見るような番組ばかりですから、大人たち、特に女性たちが見たいと思うドラマが求められていたんだと思います。

鄭

韓国専門のケーブルテレビ放送のKNTVでずいぶん前から韓国のコンテンツを見ること

ができたんですが、最近になって契約者もだいぶ増えていると聞いています。

姜

それは日本人が契約しているんでしょうね。

李

もちろんでしょう。

鄭

それ以外でも在日の人やニューカマーの人たちも多いようです。でもKNTVもコンテンツを確保するのが大変らしいです。NHKが韓国のドラマなどの著作権をとるようになってから価格が跳ね上がったそうですし。

女性にとっての「現実逃避」の場

篠藤

少し話がそれるかもしれませんが、「冬ソナ」は女性の間で人気があって、私の周りのお母さん方もたくさん見えています。それはドラマとしておもしろいというのももちろんありません。

でも一方で見ている人がすべてそうだというわけではないでしょうけれど、日常生活に対する不満、夫婦関係に対する不満を感じている人たちも多いと思います。それが「私もあんな恋愛をしたかった」という一種の現実逃避といえますか、そういう感情移入があるのではないかと思うんです。もちろんそれがきっかけでいい意味で韓国に関心を持つ人たちもいるでしょうが、他方で一番心地よい現実逃避の場になっていたというのが、あそこまで爆発的に人気が出た理由の一つじゃないでしょうか。

すごいですよ。この間も韓国に行って来たのですが、「冬のソナタ」ツアーといって皆さんいろいろなところを回って。それにカツラもすごく売れているんです。韓国人は「本当にあれを旦那さんにつけさせているんだろうか」と疑問に思っているらしいですけど。

李

あれは宴会芸用のアイテムでしょう。(笑)私はさっき「一過性」ということで言いましたが、決して悲観的に見ている訳じゃないんです。むしろこういう形で盛り上がるというのは良いことだし、みんなが見て認めるということが大事ですから。それに今回は韓国語の完全版で字幕をつけて放映しますから言葉に触れることもできますし。それは大きなことですし、「冬ソナ」の役割はそういうことでしょうから。

姜

私はウェブでいろいろ意見が交わされているところも見たことがあるのですが、それを見てすごくいろいろな発見がありました。例えば「北と南って本当に同じ民族なのですか」という疑問があったり、「平壤は中国じゃなかったんですか」とか、「ソウルで住んでいる人の生活は日本と変わらないですね」とか、「これは日本のどこで撮影したのですか」とか。それぐらいの理解なわけです。「シュリ」の与えたインパクトもそういうものでした。あれを見て初めて特に若い女性が、朝鮮半島とはどういうところなのかを知ったんです。

篠藤

実際「シュリ」と「JSA」がなければ、朝鮮半島が分断されているんだということすら知らない人たちが、いまでもかなりいたということなんでしょうね。

李

先日、朝鮮総連の幹部とお話する機会があったんですが、そうしたら「『朝流』はできないだろうか」というんです。(笑)

僕はできるんじゃないですか、と応えました。でもその上で、「何を持って『朝流』にしたんですか」と尋ねたんです。「韓流」でも「日流」でもいいんですが、それを持って何をしたいのか。金儲けや、単にイメージを変えたいんだったら他の方法でできるし、何かないと。すると「テコンドが強いからそれで何か朝流をつくれませんか」でした。ですから文化戦略が稚拙なんですね。そこがちがうと思うんです。

僕は南北の映画祭にも関わったり、実際北に行って映画をつくったこともあります。そういうことをやってきましたから、気持ちはわかるんです。「韓流」がでてきているから、違う形で「朝流」もつけれませんか、そういう思いはわかります。でも本質がわかっていない。そのためには日本社会をきちっと分析してその上で進めないとなつのは無理です。ただ「朝流」がまったく無理だとは思いません。きちっと段階を踏んでいけば不可能じゃないと思います。

「韓流」と北朝鮮バッシング

だって「韓流」がブームになって、一方で北朝鮮バッシングが強まったでしょう。すると一般の人たちが「昨日の冬ソナ見た?」「よかったよね」という会話をしながら、その次には「ところであの金正日は...」というふうになるわけでしょう。これは同じ人たちの会話なんですよ。それがいったい何かということを私たちはよく考えないとだめです。なんか、胴上げされていて、急に地面に落とされるようなものですから。

そう考えたら、在日としてどうして「韓流」を手放しに喜べるのかということなんです。それに「韓流」と北朝鮮バッシングが、同時期に発生して、同時期にピークを迎えている

ということもよく考えないといけません。

篠藤

いまの「韓流」のなかで、韓国に興味を持つ人が増えて、ハングルを勉強する人も増えて、それはいいことなただけけれども、でもあいかわらず在日に対する認識はまったく深まらない。まるででないかのごとくなっている状況は、あまり変わっていませんね。

李

だから在日をテーマにした「東京湾景」というテレビドラマがありますが、あの数字がどうしてあんなに悪いのかということでしょう。一〇%切ってますし。もうみんな見たくないわけでしょう。一〇%切っているドラマというのはほとんどつけているだけでみんな見ていないということなんです。一四%越えるぐらいいいかないと。誰も興味がない。それに在日のドラマにも興味がないんです。

鄭

僕は「東京湾景」を一～二回見たことがあるんですが、ああいう在日をテーマにしたドラマができるというのは明らかに「韓流」の影響だと思うんです。それを、どうつなげていくかということを考えないと。

李

フジテレビのプロデューサーがまったく勉強していないんですよ。あきれましたね。「そんなことも知らずにここに踏み込むのか」という感じです。勉強せずに踏み込めるような問題じゃないんです。NHKの「ちゅらさん」だって沖縄のことを勉強してやっていますよ。

篠藤

私のまわりの在日の友人たちは、あのドラマを見て、「日本中の在日がツッコミを入れたいかならう」と言っていました。

李

まったくその通りで。ですからフジテレビの物まね体質に問題があるんだけど、それで成功してきたところだから。

鄭

物まねでも良いものもあるので、問題はそれ自体がどうかじゃないですか。

李

そうです。ですからどうせやるならきちっと、深く踏み込んで恥ずかしくないものをつくって欲しいという思いはありますね。

姜

僕は日韓が仲良くなろうとすると必ずそれに冷水を浴びせようとするやつらがいると思うんです。例えばワールドカップでいろいろなところに取材にいったんですが、例の審判疑惑、あれをしつこく日本の雑誌は書くんですね。それも直接じゃなく。

そんな風に日韓が仲良くしようとするのを悪く言うやつがいて、何らかの形がでてくるんです。でもいまの「韓流」には、フジテレビもそうですが、そういう風に言ってきた勢力を押さえてしまったという感じがありますね。良い悪いじゃなくいままで文句を言ってきたところが、自分たちも儲かるということになるとびたっとそれがとまる。そういう効果は確かにあります。政界までなびいているわけですから。

篠藤

びっくりしたんですけれど、この間市川海老蔵さんの襲名披露公演に行きまして、演目は助六だったんですが、その助六には股くぐりという有名な場面があります。それでお兄さん役の勘九郎さんと海老増が、侍に言いがかりをつけて股をくぐらせるのですが、そこで突然「冬ソナ」の音楽が流れて、侍がメガネとマフラーを出して、「ヨン様スマイル」とか言って股をくぐるんです。成田屋さんの襲名披露の公演で韓国ドラマのパロディがでるなんて、こんな時代に日本はなったのかって信じられない気持ちでした。

それに場内はオバサマが多かったですから、受けること受けること、大爆笑ですよ。そこまで一般化というか、当たり前のこととして受け止められているのかと衝撃的でした。

李

日本中でいまそういう現象が起こっているんでしょう。

鄭

私は良いことだと思いますね。そういう日本文化の古典的なところまで韓国の文化を受け入れているということですから。

篠藤

そういう意味ではやっとなり前のことになったんでしょうね。韓国のいろいろなことが身近なものに感じられるようになったのは。そこからスタートですからね。

姜

スタートに来るまでが長かったんですね。

鄭

それはやはり李鳳宇さんをはじめ在日コリアンの人たちの努力と、文化の力でしょうね。

姜

文化の力というのは政治よりも早いです。政治のできないことを文化のほうが先に進めてしまっているんですね。

李

ペヨンジュンを呼ぶときにはいろいろ考えました。四日呼んだんですが、一日はNHKにあげたんです。警備やなんだと大変だったです。来日で何千万という費用もかかったんですが、その四日の間、ニューオータニに泊まっている間に僕の携帯電話がパンクしちゃったんです。私の携帯の番号をどこでどう調べたのか知りませんが、ペヨンジュンに会わせるといってね。それも某元総理大臣夫人とか有名旅館の女将とか、政財界トップの夫人とか、ともかく全部断るしかなかったんですが。

それを目の当たりにして私は、自分が考えているよりもペヨンジュン、そして「冬ソナ」の浸透力というのはすごいんだなと思いましたね。そういうのを見てみると、政治の力というのは意味をなさないんじゃないかと思うぐらいです。

鄭

そういう意味では先ほど姜誠さんが言っていた、金大中大統領の文化開放と日韓関係の改善は大きかったとも言えるんじゃないでしょうか。でも一方で北朝鮮バッシングもあるという指摘もありましたが、それについてどう思っていますか。

文化交流は他者への想像力を育むもの

姜

いずれにしてもいまはブームじゃないですか。ブームというのはいつかは去るものですし、結局はブームが去った後に何が残っているのかということです。ブームが消費されるだけで終わってしまえば、今あるような韓国は持ち上げて、北朝鮮はバッシングするという関係はそのまま何も変わらないと思います。北と南が同じ民族であるという視点がないままに。

僕は文化交流で一番大切なことは他者への想像力を養うということだと思うんです。だからそういうことをきちっとやって、ヨン様と金正日と同じ民族なんだという、そして日本

には同じ民族としての在日もいるんだという、そういう想像力を持ったところに着地して
いけないといけないと思うんです。

そうじゃないといくら「韓流」が高いところで進んだとしても、一方で北朝鮮の、権力者
じゃない、一人ひとりの市民に対する共感とか同情とか、あるいは同時代を生きていると
いう想像力もなくて、類型化して排除するとか、そういう見方しかできなければ文化交流
の意義は半減するだろうと思います。これだけの「韓流」があるんだから、そういう着地
点にもっていければと思うのですが。

鄭

それは日本の国のビジョンのなさにつながると思います。韓国は日本文化の開放と同時に、
北朝鮮に対しても包容政策をおこないました。それが大事だと思うのです。

アジアにおける韓国の国家ビジョンを考えると、今後中国の存在が大きくなっていくだ
ろうし、そのために日本や北朝鮮との関係がどうあるべきかということを考えてと思うの
です。そうした観点がいまの日本には不足しているんじゃないでしょうか。

姜

それは今に始まったことではなくて、昔からそうですよ。日本にアジア戦略がありました
か。アジア政策も対中政策もないでしょう。

篠藤

映画のことに話を戻すと、「シュリ」や「JSA」、「シルミド」といったような、ああいう
テーマが映画としてつくられるようになったこと自体、韓国の変化だと思うんです。

関心のある人は最初から自分で勉強するんですが、一般の日本人はそういう、映画などを
通じて、それまでまったく関心がなかった人も、朝鮮半島の現実に触れて知っていく、そ
れが大切だと思うんです。もちろん政治がやるべきことも大きいとは思いますが、文化
の持っている価値、力、つまり知るきっかけを与えるという意味は大切だと思うのです。

鄭

今までの話をまとめて結構ですが、今後、在日の文化というのはどういうふう発展し
ていく可能性があるのか、そのための課題は何かということについてお話を聞きたいので
すが。

韓中日の合作映画を

李

在日の全体像がどうあるべきかということは、私にはわからないのですが、私自身、韓国
映画を日本に広めて、韓国を知らしめるという役割はもう必要ないと思っています。これ

からやらなければならないと思っているのは、自分自身の立場を有効に使うということです。

今回、私は釜山映画祭に、日本の映画人、プロデューサーたちの連合体である日映協という団体の理事として、韓国の釜山の協会をつなげる仕事で行ったんです。韓国では中国、香港の団体も呼んでいて、その四者連合で規案をつくっていこうという話になりました。いまは他の国と合作するとなったときにルールも何もない。著作権をどうするかとか、費用の問題はなどなど。まずはそういうもののルールづくりをしないといけないと思っています。

それがすんだら、例えば中国と韓国と日本が合作で映画をつくる。中国もいろいろな得意分野がありますよね。ワイヤーアクションは世界一ですし、歴史もあるシドラマもある。それに日本には緻密なデジタル技術があるし、韓国にはものすごく感情表現があるし、個々の能力はすばらしい。そういうものを合わせていけばものすごい映画ができて、その映画が韓国、日本、中国で同時に公開されて、一〇〇〇万人が見る、そういうことが私はすぐにできるんじゃないかと思います。そしてそうなれば今度はアメリカに影響する、ヨーロッパに影響するようになっていくでしょう。

そうしたビジョンの中で我々が一番影響力を発揮できる存在なんだと、そうなるべきだと思います。これはあくまで映画に限ったことで、そこを離れる在日一人ひとりが立っている位置が違うので一概には言えませんが、でもそういうことに近い役割というのは他の分野でもいろいろできるんじゃないかと思いますけどね。

鄭

私も先日、韓国のNGOの招請を受けて中国の学者も参加する東北アジア共同体をめざすというテーマのシンポジウムに参加するために中国に行きました。そう考えると韓国、中国、日本の市民団体、NGOもそういう役割を担うべきでしょうし、具体的な動きも進んでいます。ですから今後在日にとっても市民という視点で自分たちのあり方を考えるというのも大事ではないでしょうか。

在日は東アジア共同体にむかうべき

姜

例えばEUでは、「ルネ・メソッド」という言葉をよく使いますが、フランスとドイツという、お互い侵略して侵略された仲の悪い、あの二国がEUの核でしょう。この関係はエネルギーの共同管理から始まったわけです。

だからアジアで日韓は、規模は違っても同じなんです。本来一緒になれないドイツとフランスが石油や石炭の共同管理で共同体をつくらうとしたんです。目的や利害が違って、何か共通の利害があれば一緒にやりましょうと。そしてNGO、NPOの運動もワン・

イシュー主義といいますか、課題で共通の利害があれば一緒にやりましょうと、そういう運動になっている。

文化交流というのは、お互いの関係に対する想像力といいましたが、文化交流の後に何が残るのかを考えなくちゃいけない。それはやはり在日から考えると東北アジア共同体だと思うんです。国境や国家の領域を越えた新しい公共社会。何故なら在日自体が政治的に分断されてきましたから。文化交流というのはそのための「露払い」だと思うんです。政治ができないことを文化だったらできる、そして国境を越えて共通のアイデンティティを持つことができるでしょう。その共通性に基づいて、例えば政治的システムを変えていこう、経済をこうしていこうということになるでしょう。

私は在日はこのままだったら無くなっていくんじゃないかと思うんです。だからこそ在日が国境をまたぐ存在にならないといけない。李鳳宇さんが言ったように、アジアでの合作のような、そういう流れにそれぞれの分野の人たちが行かないとだめだろうと思います。だから在日も日本だけじゃなくてソウルや平壤や北京や東京をまたぐ存在になって、後はそれに政治のシステムが追いついていかなきゃいけない。そこで「ルネ・メソッド」の意味ですけど、文化交流というのは「ルネ・メソッド」の一つの表現じゃないかと思います。その次に文化交流を越えてお互いの共通のアイデンティティを土台に、国境を越えた地域共同体、そうしたものを形成する方向に、在日が向かう。

そして例えば映画や経済、文学その他いろいろな分野で登場することが、大きな言葉で言えば平和や活力につながっていくでしょう。

だから「韓流」のあとに日韓を打ち出していかないとだめなんです。そうしないと文化を消費だけして、結局は意味がないものになってしまうでしょうから。

鄭

一九九〇年に「アジア共同体」という言葉を初めて使ったときに、私も誤解されたんですが、やはり実際に国境をまたいでいって、そして在日だからそういう発想が生まれたんですよ。私もこれまで中国、ロシア、韓国と行きましたが、シンポジウムなどで招請されて行ってます。

何がいいたいかといいますとそういうビジョンが共有される、具体的な論議と課題となる、そういう時代を迎えているということなんです。

篠藤さんはいかがでしょう。

篠藤

「卵が先か、鶏が先か」じゃないですけども、本当に人の気持ちの部分は大きいと思います。相手に親しみを持つとか、知りたいと思うとか、それは韓国だけじゃなくて北朝鮮や在日の人に対してもそうです。ごくあたりまえに隣にいる人たちに対して、ごくあたりまえに思いやるという、そういうことがやっといま始まったなと思います。

だからこれから本当に隣にいる人たちと、どういい関係をつくっていくかということを実際に考えなくてはいけないと思います。いまようやくその準備が少しですができてきたわけですから、いろいろな人たちが、いろいろな分野で知恵を出していかないといけないと思います。

先ほど韓国や日本、中国の話ができましたけれども、今年の三月に亡くなった韓国の金大煥さんというパーカッションの方が、もともと韓日中は共通の文化を持っていて、つながっていた。だからいまはそれぞれ違うけれども、中国と朝鮮半島と日本は一緒に何かをつくっていかないとだめなんだと生前おっしゃっていたんです。実際、金大煥さんは、音楽や書を通して、八〇年代からこういう活動を実践していらした。

鄭

それは非常に大切なことですね。いま流れている音楽や、ドラマそういうものが共通の文化になり、新しい価値を創造できるような潮流をつくっていくことができると感じます。本日はありがとうございました。